特別レポート

サイモン・ラトル指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

次世代を担う子どもたちへの贈り物

2017年11月下旬、サイモン・ラトル率いるベルリン・フィルハーモニー管弦楽団が来日し、滞在期間中、通常の公演とは別に、音楽を学ぶ学生に向けた今回特別の公開リハーサルと、子どもたちのためのアウトリーチが行われました。その中で、世界最高峰のアーティストである彼らが子どもたちに見せてくれたのは、実直に本気で音楽に向き合う、ひたむきな姿勢でした。その姿を通して彼らが伝えようとしたのは、どのようなことだったのでしょうか。公開リハーサルを江田司先生(名古屋学院大学准教授)、アウトリーチをヴァン編集部がレポートします。

Sir Simon Rattle & Berliner Philharmoniker

特別レポート

公開リハーサル

白熱の60分！ラトル＆ベルリン・フィル

本番約２時間前、世界最高峰と言われる楽団の音が仕上がっていく瞬間に立ち会いました。サイモン・ラトルとベルリン・フィルの真剣な音楽づくりの現場についてお届けします。

取材・文　江田 司（名古屋学院大学 准教授）
Text：Tsukasa Eda

緊張が走る音楽的バトルのリハーサル！

2017年11月24日、サイモン・ラトルとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団がやって来た。香港から２週間に及ぶアジア・ツアーの最終地、東京での２公演初日である。本番を２時間後に控え、リハーサルが音楽を学ぶ学生230名に特別公開（TDK協賛）された。曲目は、R・シュトラウス《ドン・ファン》、バルトーク《ピアノ協奏曲第２番》、ブラームス《交響曲第４番ホ短調》。通常、ベルリン・フィルはリハーサルを絶対公開しない。ラトルが「みんなもう少し優しくなれば」と言うほどに音楽的主張（エゴ）のバトルが繰り返されるからだ。また、今回のピアノ独奏者はユジャ・ワンで、本来出演予定だったラン・ランが左腕腱鞘炎でキャンセルしたため急遽の代役である。ピアニストにとっては20世紀最高難度のピアノ協奏曲を一気にオーケストラと合わせるのだ。

至高「響きの空間」サントリーホール ワインレッドの座席

隣接ホールでのプレ・レクチャー（講師：朝岡聡氏）を終えて学生と共に16時半大ホールに入る。中通路以降であれば席は自由なので、一階中央（通常の公演であればS席で、中でも特上の位置）に座る。椅子の表地はぶどう柄。椅子幅や座席間も広い。背板と肘掛けはオーク（樽）材。座っているだけで豊かな気分になる。美しいホールの前面に広がる舞台は21×12m（ほぼ教室４つ分の広さ）。臨場感がありわくわくする。舞台に目をやると中央にはピアノ、後方には平間と扇型の大きなセリが３～４段、放射状に60人の弦楽器奏者が座る。後方中央には管楽器と打楽器27人が乗る。扇の要には指揮台。リハーサル開始10分前にはほぼ全員が揃う。個々に音を出す。トランペットは極上の音だ。響きが太陽の光のように降り注いでくる。生（ライブ）でなければ味わえない空間とサウンド。３分前に客電が落ち、ラトルが最後列のトロンボーン奏者に話しかけてから降りて来る。とてもフランクな感じである。ブラームス第４楽章のみにある彼らの重要な出番を「リハーサルでは省略する」と予め伝えていたようだ。

この公開リハーサルの後、東京公演１日目の本番が行われた。コンサートマスターは樫本大進。
樫本は2010年からベルリン・フィルの第一コンサートマスターを務めている

公開リハーサルでのサイモン・ラトルとユジャ・ワン。
ラトルは2017年９月からロンドン交響楽団の音楽監督も務めている。ベルリン・フィル首席指揮者兼芸術監督は2018年夏に勇退する

ラトルとベルリン・フィル まるで21世紀型の授業！！

《ドン・ファン》は冒頭数小節ですぐに止められた。第１小節、１拍目弦楽器の情熱的な上昇音型に続く２拍目の管楽器の入り、合ってはいるが微妙に遅れる。「１、２！」と手で打ち手短に指示を出す。見違えるようなパワフルな音が紡ぎ出されていく。曲は進む。集中力の変化はプレーヤー同士のコミュニケーションや体の揺れ、87人の視線の方向で分かる。ちょっとした合間にお互いの弾き方や吹き方が話し合われる。ついにはラトルに質問「この（30人のヴァイオリンが一斉に出る）部分の指揮が分からない」をぶつけ指示を引き出す。《交響曲第４番》は、冒頭の美しい旋律が*p*（ピアノ）で歌うことが求められた。即座に繊細な響きが立体的になる。このあと楽員たちの反撃がある。第２楽章から始められた《ピアノ協奏曲第２番》では、60人の弦楽器奏者がサウンドを保ちながらも極限までの*pp*（ピアニッシモ）を聴かせた。「この*pp*はどうだ！」と言わんばかりに。ユジャ・ワンのピアノとオーケストラとの白熱したリハーサルが終わる。聴き入っていた学生から一斉に拍手が起こった。

奏者の反応も予想して言うべきことを予め考え抜き、オーケストラに対してタイミングを外さないラトルの反射性と即興性。われわれ教師にとって学ぶところが多いと感じた。

このたび行われたベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の来日公演は、2001年から開催されているTDK株式会社特別協賛の「TDKオーケストラコンサート」の一環で、一般に公表されている公演の他、非公開として音楽を学ぶ学生のためのプログラムや、出張音楽教育プログラム（アウトリーチ）も行われている。

写真：TDK株式会社提供

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団（BPO）

創立135周年を迎える世界最高峰のオーケストラ。初来日は1957年（22回目）。団員127名。「猛獣の集まり」と評される超個性派集団である。この猛獣たちを束ねるリーダー（コンサートマスター）の一人は天才ヴァイオリニスト樫本大進。指揮者の選任を含め全て自主運営で議論が戦わされる。また、新人は厳しい入団試験と試用期間２年ののち、団員2/3以上の賛同を得て正式入団となる。「２年間で仲間として進歩しているか？」が見られるという。

サー・サイモン・ラトル

1955年イギリス・リヴァプール生まれ。卓越した音楽性と人間味が愛され2002年団員たちの選挙によりBPO首席指揮者兼芸術監督に就任。直ちに基金を募り「教育プログラム」を開始。年齢や出身国が異なる250名の移民の子どもたちとBPOによるダンス・プロジェクト《春の祭典》で成果を収める。今まで様々な教育プログラムを展開する。リハーサルを絶対見せないBPO。だが〈音楽を学ぶ日本の若い人々への応援〉としてラトルは公開した。

江田 司（えだ・つかさ）
名古屋学院大学 准教授
1953年和歌山市生まれ。「教師とオケ大好き」を貫き、公立・国立小学校音楽専科教諭として37年間勤務。その間、ゲルハルト・オピッツ氏（ピアノ）を始めプロ演奏家との協演を市民オーケストラと、また市民オペラ・バレエ団・合唱団・学生オーケストラなどの指揮を務め、今に至る。教育現場とオーケストラ経験を生かして鑑賞指導などの研究を深める。本誌『ヴァン』では野村萬斎氏と対談。2015年から現職（音楽教育）。

特別レポート

TDKアウトリーチミニコンサート in 中央区立晴海中学校

ベルリン・フィル・メンバーが学校を訪問
音楽を通した子どもたちとの対話

合同演奏・合唱の様子。吹奏楽伴奏で『ふるさと』を歌う子どもたち。
指揮は晴海中学校の井村友里先生*

ベルリン・フィルの弦楽メンバー５人が、東京都中央区立晴海中学校を訪れて開かれたアウトリーチは、コンサートだけではなく、メンバー自身が演奏曲について説明したり子どもたちからの質問に答えたり、ときには子どもたちに質問を投げかけるなど、さまざまなやりとりがありました。

世界最高峰の楽団メンバーによる非公開アウトリーチ

11月22日の午後、翌日に来日公演初日を控えたベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のメンバーが、東京都中央区の晴海中学校全校生徒と月島第三小学校６年生児童を対象とした「TDKアウトリーチミニコンサート」を行うため、晴海中学校の体育館を訪れた。聴衆は子どもたち約500名と職員・保護者約100名を合わせた約600名。一般には周知されることのない非公開のミニ・コンサートである。

開演前に、晴海中学校校長の小谷周一先生は「ベルリン・フィル・メンバー５人の演奏を、限られた時間ではありますが、楽しんでいただきたいと思います」、中央区教育委員会指導室指導主事の清水浩和先生は「このベルリン・フィル・メンバーの演奏をじかに聴けることはなかなかありません。心から楽しんでいただけたらと思います」と、それぞれ子どもたちに語りかけた。

司会の生徒に促され、体育館の入り口からステージへと、子どもたちが座る客席の間を笑顔で通り抜けながら登場したベルリン・フィルのメンバーは、ドリアン・ジョジ氏、クリストフ・フォン・デア・ナーマー氏(以上ヴァイオリン)、ユリア・ガルテマン氏(ヴィオラ)、マルティン・メンキング氏、クヌート・ウェーバー氏(以上チェロ)の５人で、この日のために編成された弦楽五重奏団だ。

子どもたちに贈った「本物」の音楽

メンバーが子どもたちのために選曲し演奏したのは、シューベルトの『弦楽五重奏曲ハ長調』から第１・３・４楽章。演奏前にクリストフ・フォン・デア・ナーマー氏が「皆さんの前で演奏できるこの機会をとてもうれしく思います」と話し、作品について詳しく説明した。

全楽章通すと50分にも及ぶため、２楽章を割愛したという同作品は、決して聴きなじみのある有名曲ではないが、演奏には高度な技術を要するもので、シューベルト最晩年、31歳で死を迎える２か月前に完成させた最高傑作だ。シューベルト唯一の弦楽五重奏曲で、クラシック音楽の歴史においても音楽家にとっても、非常に重要な作品である。

短い有名曲を幾つか演奏するよりも、体力も精神力も大いに必要なこの作品をあえて選んだことには、子どもたちに「本物」を聴かせたいというメンバーの強く熱い思いを感じ取ることができる。

演奏時間は約35分間にわたったが、ベルリン・フィル・メンバーの思いを受け取ってか、月島第三小学校の児童たちも晴海中学校の生徒たちも皆熱心にステージを見つめ、世界最高峰の音に耳を傾けていた。その様子は、演奏後にメンバーが「皆さんが一生懸命に聴いてくださってほんとうにうれしかった」と感激を子どもたちに伝えるほどであった。

音楽を通して向き合った70分間

演奏終了後、アーティストへの質問コーナーが設けられ、子どもたちの問いにメンバーが答えていった。「『心を込めて歌う』ということは、具体的にどう楽器に表すのですか」という問いに対しては「とてもよい質問ですね。私自身のことを話せば、心はずっと歌っています。その間はずっと頭も脳も活発に活動しているんですね。この頭と心のコンビネーションが非常に大切です」とユリア・ガルテマン氏。

「音楽をやる中で、自分のセンスはどのように磨いていったらよいのでしょうか？」という問いにはクリストフ・フォン・デア・ナーマー氏が「とにかくたくさん練習しなければいけません。その練習量はすさまじいものです。自分の音、自分のことを考えていくと、周りの音をよく聴くことができるようになります。そのような中で、センスはだんだん磨かれていくことなんです」と伝え、「演奏するうえで大切なことは何ですか？」という質問には、マルティン・メンキング氏が「ぜひ私が答えたかったのでマイクをとりました」と前置きをし、「まず理解をすることです。そして音楽を知ること、音楽を好きになること、それが大事です。合奏をするときは、互いを尊重、尊敬する気持ちがなければよい音楽をつくり出すことはできません」と語った。

最後に子どもたちが合同演奏・合唱で『ふるさと』を披露すると、クヌート・ウェーバー氏が「皆さんのすばらしい演奏に心から感動しました。皆さんの歌と演奏を聴きながら、皆で心を合わせて一緒に何かをすることは１人で何かをするよりも、とてもすばらしいことだなと思いました」と感想を述べた。

およそ70分間のアウトリーチは、子どもたちとベルリン・フィルのメンバーが互いに真剣に向き合ったひとときであっただろう。

(ヴァン編集部)

ユリア・ガルテマン氏の問いかけ「何か楽器をやったことのある人はいますか？」に対して手を挙げる子どもたち

花束贈呈。子どもたちからメンバーに花束を渡し、握手を交わした

「TDKアウトリーチミニコンサート」に出演したベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のメンバーはシューベルト『弦楽五重奏曲ハ長調』を演奏した*

TDKアウトリーチミニコンサートin中央区立晴海中学校

内容
- ○ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団(弦楽五重奏団)入場・演奏
- ○生徒からアーティストへの質問コーナー
- ○合同演奏・合唱
- ○出演者による感想
- ○生徒代表より御礼の言葉
- ○花束贈呈、記念撮影

*写真：TDK株式会社提供

小谷周一先生
(中央区立晴海中学校 校長)

アウトリーチを終えて

「TDKアウトリーチミニコンサート」最後の合同演奏・合唱で指揮を務めた井村友里先生にお話を伺いました。

── 演奏をお聴きになっていかがでしたか？

「体育館なのに、すばらしい響きがすることに驚きました。ここはサントリーホールなのかと思いました(笑)」

── このような機会を子どもたちにどう受け止めてほしいですか？

「クラシック音楽は子どもたちにあまりなじみがありませんが、ベルリン・フィル・メンバーが来ることを子どもたちは楽しみにしていました。今日のことが、クラシック音楽に触れてもらえるよいきっかけになればいいなと思います」

井村友里先生(中央区立晴海中学校)

授業者に訊く──❶

授業は歌唱で始まる。レパートリーになるよう練習してきた『Good-bye また明日ね』を歌う子どもたち

積み重ねで身に付ける音楽の力

授業者：川上真珠美（瑞穂町立瑞穂第一小学校）　**聞き手：千田鉄男**（東大和市立第二小学校）

今回の「授業者に訊く」は、２校とも小学校の授業です。まずご紹介するのは、瑞穂町立瑞穂第一小学校。『オーラ リー』を教材とする４年生の授業を訪ね、子どもたちが発した言葉や希望を音楽につなげる指導法のポイントや、彼らが大人になったときのことを見据えた指導について伺いました。

○ちだ・てつお
東大和市立第二小学校非常勤教員。東大和少年少女合唱団指揮者、羽村市吹奏楽団指揮者、リコーダー・アンサンブル"コンチェルティーノ・タマーニ"メンバー。子供のための合唱曲、合奏曲、リコーダー曲の作曲／編曲多数。

レパートリーづくり

千田： 今日の冒頭は『Good-byeまた明日ね』を歌いましたね。授業は歌唱から入るのですか？

川上： はい。子どもたちはチャイムの鳴る２、３分前に音楽室へ来て、すぐにここで発声体操をすることになっています。時間があればグループごとに歌の練習をします。チャイムと同時に係が出てくるので、全校共通の「今月の歌」を歌うということをやっています。学年に応じたハードルをクリアするとレパートリー表に書いてもらえます。「今月の歌」がクリアしたら、あとは各学級で好きな曲を選び、レパートリーを増やすことができます。

千田： どの水準になればとレパートリーと認めてもらえるんですか？

川上： ３年生の場合はきちんとブレスができていることが条件です。ブレスは作詞者と作曲者が考えに考え思いを込めて、「ここまでは１つのフレーズにしてね」と言っている。それを３年生になったらできなくてはなりませんね。

千田： かなり高度ですね。

川上： 高度ですが、３年生で身に付けさせたいことですし、やっていけばできるようになります。４年生は曲の感じを考えて歌えなければレパートリーにはなりません。あとは、暗譜が条件です。５・６年生になるとそれなりに歌えるようになってきます。月１回の音楽集会で高学年の声にあこがれをもち、少しでも近付きたいと思って、また学級で練習します。高学年もより一層がんばります。この積み重ねが子どもたちの歌、音楽の力を支え、伸ばしているように思います。

言葉だけでなく「音楽で話す」

千田： 今日の授業のポイントは『オーラ リー』による「曲の気分に合った演奏をつくろう」でした。まずは、子どもたちにこの曲の「感じ」を出させたという授業ですね。前方のホワイトボードには「感じ」と「イメージ」と分けて表示されていましたが、子どもたちにとってこの２つは違いますか？

川上： 違うようですね。「感じ」は“優しい”や“きれい”で、「イメージ」は映像でパッと頭に浮かぶもの。それが『オーラ リー』では自分たちのイメージが“天空の海”だと言うんです。そこで「“天空の海”ってどういうものなの？」と聞くと、その「感じ」は「優しくて滑らかで、川が空の上で流れている感じ」ということのようです。だから少し違うんです。

千田： 先ほどグループ練習をしていましたが、子どもたちは最後までイメージをもって活動しているのですか？

川上： 全員が最後までイメージをもって活動するというのは非常に難しいですね。技術面の学習も必要ですし、そのためにもう一度、次の時間にそこを押さえて練習に入ろうと思います。

「練習タイム」の様子。
グループ学習で子どもたちは、演奏しやすい隊形に短時間で並ぶ

千田： その後の「練習タイム」「聴き合いタイム」の設定が、おもしろかったです。グループで行う「練習タイム」の時間を子どもたちに「どのぐらいにしますか？」と川上先生が聞いたら「３分」や「５分」という意見が出ましたね。そこで先生が「それでは５分にしましょう」と時間を決めました。ここでタイマーを取り出す先生も多いんだけれど、先生は何もせず始めて、実際に練習は５分以上かかりました。その後、子どもたちに「練習は15分かかったね。音楽は５分なんて短時間ではつくれないものだよね。音楽はそういうものなんです」とおっしゃられたのが印象的でした。子どもたちが時間の使い方を学ぶことにもつながると思います。

川上： 子どもたちの中で○分という感覚は、４年生ぐらいまでだと非常に曖昧ですね。３分が一体どれぐらいなのかまだ実感できない。「この曲を１回歌ったらどれぐらいの時間がかかるんだろう」「この楽器のセッティングをして次に○○をしたら……」と考えてやってみる。こういうことを繰り返し経験していく中で、さらに発表するためにはどのぐらいの時間が必要なのかが分かってくる。５年生になれば、自分たちで組み立てて必要な時間内にできるようになります。

千田： 「練習タイム」のあとの「聴き合いタイム」では、子どもが曲の気分に合った演奏をつくっているかどうかを他のグループが聴いて、相互評価をしました。そこに、注意深く川上先生が介入していましたね。

川上： ただ話し合うだけでなく、そのことを音に出したり聴いたりして考える、「音楽で話す」ことを大事にしています。実際にどうだったか意見を聞いてみると、今回は「木琴と鉄琴が暗い」という意見が出ました。「暗い音」というのは何なのか、言葉の意味を音にしないと次につなげられません。ここでは音が弱すぎる、ということだったんですね。リコーダーの音もお化けみたいでしたね。今日は時間がなくてできませんでしたが「リコーダーは息をたっぷり出せばいいんだよね」ともう一度演奏につなげられればよかったのですが。

千田： 技術的に言えばリコーダーに吹き込む息が少なかったわけですが、それを子どもたちが気付いて意見を出したのはすごいことです。すくい上げる先生もうまいですよ。

○かわかみ・ますみ
瑞穂町立瑞穂第一小学校 指導教諭

意思を表現に結び付ける

千田： 今回の参観の前に、別の授業を見せていただきました。そのときは６年生の授業で宿題として『地球星歌』のプリントの余白に、この歌がどんな歌なのか自分で歌詞を読んで考えてくるようにという課題が書かれていましたね。

川上： 『地球星歌』は奥深い詩だと思うので、歌い始めの時期に一度聴いてみて、初発の感想を書かせます。ここから先、歌を深めていったあとに、もう一度感想を書かせてみて、どのように自分の気持ちが変わったり、読み取り方が変わったりしたのかを掘り下げたいと思います。

千田： 子どもたちが『地球星歌』を最初に歌ったときからかなりハイレベルでしたが、あれ以上の歌にしていく先生の手だてはどのようなものをお考えでしょうか？

川上： 例えば「『私は祈る 平和のために』というフレーズを大切にしたい」という意見が出てきた場合に、大きな声で歌うのか、それとも音を伸ばすことによって表現するのか、それとも表情や強弱の変化なのか。子ども自身が、どのようにして表したいのか問いかけていきます。子どもたちが大切にしたいと思うものが分かったら、どうすればそのように表現できるのかということに迫っていこうと思います。

千田： 川上先生は、子どもがよくできたときも「今のでいいよ」ではなくて、必ず一度子どもにフィードバックしますね。だから子どもに力が付くのだと思いました。子どもたちに聞くと「よい」という意見もあれば、「ちょっと長すぎた人がいる」「もうちょっと長いほうがいいんじゃないか」など、いろいろと出てくる。そこで川上先生が「じゃあもう一度やってみようか」と言ってくれるので、子どもはそこに集中するんですね。

川上： それでも子どもたちが分からないときには、「今の皆の歌い方はこうだったけ

れど、これでいいのかな？」と、わざと下手に歌うこともあります。

千田： 同じく以前に拝見した３年生の授業では、はじめてリコーダーのファの指づかいを習う時間でした。普通は「ファはこういう指づかいです」と指導する先生が多いのですが、川上先生は「ファは教科書に書いてあるからね」と教えました。すると子どもが自ら調べて「こうだ」「いや、こっちじゃない？」と言いながら、教科書を参考書のように、よりどころとして使っていたのが印象的でした。

川上： 教科書はよくできているので、私たち教師が上手く使うことで、子どもにとってすばらしい参考書になります。教科書で、調べた箇所には丸を付けさせたり、どんどんメモさせたりします。分からないことが出てきて調べてみたとき、すでに丸が付いていれば「前にもやっていた！ きちんと覚えなくちゃ」と子どもたちが気付くことにもなりますから。

千田： 子どもたちに意識させるため、音楽室に〔共通事項〕や音楽の要素を書いて貼り出しているケースが多いのですが、川上先生が指導されている環境にそのようなことはなく、授業中に音楽を通して押さえられていますね。〔共通事項〕の先生の捉え方はどのようなものでしょうか？

第２音楽室に移動してグループ学習を行う子どもたち。
音楽室で授業を受ける３年生になると、子どもたちは音楽室の使い方から指導を受ける

川上：〔共通事項〕を書いたものは全部こうしてカードにしています。やはり外せないことですので。子どもたちが望む音楽をつくれるように、または子どもからそれが出てきたら、「実はこうだよ」とか「よく分かりましたね」と見せて学習しています。

千田： カードは出しっぱなしにしないで、必要なときにポイントとして見せるのですね。すばらしいと思います。

学習は音楽室の使い方から

千田： 演奏するときの並び方も、川上先生はグループにただ任せっきりにはしませんね。自分たちの考えを実現しやすいように並び方についても細かくアドヴァイスしている。グループに任せることを増やしていくために、細かく積みあげている。何かをセッティングしたり、他の部屋を使ったりしても、子どもたちがきちんと片付けて帰る。電気を点けっ放しにしないとか、ドアを閉めるとか、そういう細かいことが徹底されていて、短時間でグループ学習をする隊形になっていました。

川上：「音楽室は、あなたたちだけではなくていろいろな人が使うから、次の人も同じように使えるようにしないといけないね」という話をいつもしています。１・２年生の音楽は教室で行いますが、２年生から生活科ルームに楽器を取りに行きます。その中で、自ら整理整頓したり手伝ってくれたりする子が出てきた時に「〇〇ちゃんのおかげで本当に助かったな」と言うと、「次は私がやる」「僕がやる」と他の子にも広まっていきます。

千田： こうした声掛けも上手ですよね。授業の中でもたくさん出てきていました。

川上： 子どもたちが３年生になって音楽室に来るようになると「ここに来たということはもう２年生までのことがきちんとできていて次の段階にいくんだよ」と言って、少しずつハードルを上げながら行っています。「音楽室では机がない代わりに譜面台を使うけれど、譜面台のセッティングや片付けをきちんとしなければ貸せません。ちらかった所で美しい音楽は生まれませんから」と言って、「どうすればいいのか」と子どもたちに考えさせます。３年生できちんとできるようにしておけば、放っておいても子どもどうしで「きちんと整理しよう、片付けないとみんなが困るね」などと考え言い合って整理整頓してくれます。

千田： 子どもたちも音楽室全体に目配りができているんですね。机のないこのスタイルのメリットはどのようなことですか？

川上： いつでも、どのようにでも動けるということです。「普通教室とは違って、必要であるなら言われなくてもどんどん動いたほうがいい」と伝えています。また、４年生ではオーケストラを例に見せ「パートって大事だよね」と言って、同じパートの人が一緒にいる必要性を指導しています。５・６年生になると合同授業を音楽室でもやります。これだけの広さがあれば自分たちの演奏しやすい形にどんどん椅子をセットし直してやっています。

持ち物と宿題は徹底

千田： ３年生の子どもがタオルの忘れ物をしたことに対しても、厳しく指導されていました。それから、１人の男の子が宿題を忘れたことに対しても「休み時間に遊んでいる場合じゃないでしょう、反省文を書くように」と言われていて。先生の指導は厳しいけれども、子どもたちはやればやっただけのことが返ってくると分かっているから、がんばる。持ち物と宿題は徹底しているのですね。

川上： そうですね。私は、子どもたちを音楽を通して人としてどうやって育てようかということを常に考えています。大人になってから会議で忘れ物をしてしまうなんてことが、子どもの頃こそ直せるチャンスだと思うんです。中学校に行ったらこんな面倒くさいことをしてくれる人は誰もいない。それができるのはやっぱり小学校の３・４年ぐらいまでだなと思うので。持ち物をそろえて自分で持ってくる意識を育てるということはすごく大事にしています。大人になっても優先すべきこと、やるべきことを期限までに済ますことは最低限のルールですから、宿題は徹底しています。宿題を出してから３日も経つのにやらないで休み時間に遊んでいるのはいけないし、逆に教室での宿題をやっていないのに休み時間に音楽室に練習に来るのも、絶対に許しません。それと反省文は謝罪ではなく、自分の行動を振り返って次に生かしてほしいから書かせています。

千田： 持ち物調べもされていました。全員持ち物がそろっているグループはシールがもらえる。６年生の子どもたちの練習では、楽譜が１段できるようになったら先生のところに行って演奏し、「合格」と言われたらシールをもらっていました。

川上： シールで進度が分かるので、そうしています。同じパートの子どもが見ても「この子はここが受かっていない」と分かりますし。私もこれだけの人数を教えていると、パッと見てすぐに指導できるので。５・６年生には「もうシールいらないよね」と聞くのですが「えー！」と言うんです。かわいいですよね(笑)。

「聴き合いタイム」で１つのグループの演奏を聴き、「曲の感じによく合っていた／バランスがよかった」と感じた子どもたちは「パー」、「アドバイスあり」と思う子どもは「グー」とし手を挙げる

千田： それから先生の授業では、子どもたちが全員そろって挨拶するのを見たことがありません。音楽室を出ていく時には、グループごとに「ありがとうございました。さようなら」と言って帰っていきましたし、立ち去る時には「失礼します」と言う子どもいました。

川上： 音楽室に入るときには、自分のいちばんよい声で目を見て挨拶をする約束になっています。私は一斉に挨拶をしなければならないとは昔から思っていなくて。

千田： 授業規律で困っている先生や学校がありますが、そもそも出発点の捉え方が違うのではないかと感じることがあります。本来は「私は教える。学ぶのはあなたたちでしょ」という当たり前のところからスタートしなければならない。「お願い、しゃべらないで」ではなく、「自分たちが学ぶ機会を自分たちで壊しているんだよ。だから私は厳しくするんだよ」という姿勢でないといけませんね。

毎回45分間が勝負

千田：『ヴァン』Vol.33に副島和久先生(佐賀県教育センター研究課課長)のお話が掲載されていて、その中で「中学校の先生がたには『学ばせ上手』になってほしい」と書かれていましたが、まさに先生の授業はそのようなスタイルだと思いました。

川上： 振り出しは東京都新島村の小学校でした。音楽を教えるのは自分しかいなくて、子どもたちが音楽を学べるような機会は他になく、のちのち子どもたちのためになることを自分がしなければと思ったんです。新任の頃は教え方も下手でしたし、もっとよい方法もあっただろうなとあとから思うことはたくさんありますけどね。

千田： 今、「アクティブ・ラーニング」や「主体的な学び」などと盛んに言われますが、このことが川上先生の授業では実現できている。子どもが授業に向かうモチベーションがとても高くて、それも小さい頃から気を付けて育てているように感じました。

川上： １回の授業、45分間がほんとうに勝負だと思っているので、子どもたちにも本気で学んでほしいなと思っています。

千田： 授業を改善するために、どのようなことをされていますか？

川上： 毎時間気付いたことや、子どもたちの記録をどのクラスも必ず取るようにして、それをあとで振り返っています。

千田： いつ記録を取るのですか？

川上： 授業中には記号で記録しておいて、隙間の時間にノートに書いたり、出張に行く電車の中でまとめたりします。空き時間が基本的にないので。

千田： 授業中に思い付くことは、職員室の机の前で思い付くこととは全然違っていて貴重で、ほんとうに大切なことだと私も思っています。

「楽しさの獲得」のために

千田： 学校の放送で、とてもすてきな音楽が流れていましたが、学校の音楽環境や音楽文化にも目を配られているのですね。

川上： 放送委員会の先生が私に選曲を聞いてくださるので、いろいろ探してお願いしています。また、1日1回必ず教室できちんと歌うように宿題を出しています。担任の先生がたがたいへん協力的で、朝の時間は音楽専門の学校のようにいろいろな教室から歌声が響いてきます。歌い方がだめだと指導までしてくださっています。喉を鍛えるためには、1日1回歌うことがいちばんいいと思うので、1年生から卒業するまでの宿題です。

千田： 川上先生はご自分で厳しいとおっしゃっており、確かにそのような感じもしましたが、子どもたちがのびのびと学んでいる印象を受けました。

川上： やっぱり楽しくなければ音楽ではないと思うんです。でもその楽しさというのは、学んでいく過程での楽しさや、追求していってできて、そのときの喜びや満足感として、獲得してほしい。そのためにいつも「私ができることはなんだろう？ 学校という場でできることは？ 学校でなければできないことは？ 専科でなければできないことは？」と考えています。そして最後に、私にしかできないことを見付けたいなと思ってやっています。

千田鉄男先生と川上真珠美先生。授業後の音楽室で

本時の授業の位置付け

本時は「曲の気分を感じ取ろう」の第2時です。4年生は学習発表会で音楽劇を行い、曲想に合った歌い方を学習しました。今回は合奏で、ポイントは、教科書通りのリコーダー二重奏ではなく、クラスを3グループに分け、それぞれが曲の感じに合った演奏をつくり上げることです。主な旋律だけはリコーダーと限定し、副次的な旋律やリズムを演奏する楽器、担当人数は自由に考えます。互いの演奏を聴き合い、曲の感じに合ったバランスのよい演奏をつくり上げていきます。

小林源久 先生
瑞穂町立瑞穂第一小学校 校長

授業の流れ

	学習の内容、学習活動	指導上の留意点
導入	○ 発声体操 『ゆかいに歩けば』	何のためにやっているのか意識しながら行うように声掛けする。
展開	○『オーラ リー』の主な旋律と副次的な旋律を階名唱し、前時の確認する。 ○ 3グループに分かれて、表したい曲のイメージに合う演奏になるよう工夫する。 ・練習タイム 主な旋律（リコーダー）はなめらかな奏法で、曲の山が分かるようにする。 副次的な旋律は、音のつながりに気を付け主な旋律を引き立たせるようにする。 ・聴き合いタイム 聴くときのポイント ①曲のイメージに合っていたか ②主な旋律と副次的な旋律のバランスはよかったか	・曲の感じに合った歌声で階名唱する。 ・グループの音が聞こえるように練習場所を配慮する。 ・リコーダーパートは人数を調節して曲の山が分かるようにする。 ・グループの演奏を聴いて、手で表すようにする。 ◇曲の感じによく合っていた／バランスがよかった（パー） ◇アドバイスあり（グー）
まとめ	○ アドバイスを参考に、よりよい演奏になるよう工夫する。	

授業者に訊く――2

グループに分かれて意見を出し合い、思いを込めて歌うための工夫を考える

授業から広がる、学校の音楽文化

授業者：安藤弘子（岡山市立御南小学校）　**聞き手：河邊昭子**（兵庫教育大学）

2校目は、岡山市立御南（みなん）小学校を訪れ、6年生の『ふるさと』の授業を参観しました。1～3番それぞれの歌詞をどのように工夫して歌うのかグループで活発に話し合い、それを表現につなげようとしているのが印象的でした。また、変声期の歌声づくりや学校全体の音楽活動を充実させるための工夫についてもお話を伺いました。

共有の場を大切に

河邊： 今日の授業で、子どもたちはグループに分かれたあと、すぐに話し合いを始めていました。目当てに迫るための話し合い活動に関して、先生が日頃から意識されていることはありますか？

安藤： まず各々が自分の考えをもつこと。そして音楽は共有してつくっていくものだから、友達と共有する活動も大事です。「考えるだけじゃだめ。音楽だから表現しないといけないよ」と伝えています。だから自然に、話し合いと発表はセットです。

河邊： 考えることと表現することの行き来がスムーズに行われていますね。友達と意見を出し合い、自分たちが考えたことを最後にみんなの前で発表する。発表してくれた仲間の表現に対して、すかさず大きな拍手が湧き起こる。子どもたちどうしで共有する場面、子どもたちと先生とが共有する場面など、そうなったらいいなというところで必ず共有する活動がありました。今日の授業について、先生があらかじめ期待していた部分ともう少しだったなという部分は、どのように感じられましたか？

安藤： 4つの方法（スラー、スタッカート、アクセント、テヌート）を示したことが子どもたちの印象に残ったようです。音楽に対して感じたことを表す言葉（生き生きとした、落ち着いた、など）を選んでそれらを歌い方につなげる活動よりも、アーティキュレーションの違いを試すほうが楽しいという傾向になっていました。

河邊： 子どもならではの率直な反応ですね。

安藤： そうですね。4つの方法は、音楽発表会などで難しい楽曲を歌うときに「こういう記号が出てきたら作曲者が強調したいところだ」と気付けるようになればと思い、紹介しました。また、言葉と歌い方をつなげる活動は、言葉によって表現も変わるということを実感してほしくて行いましたが、今日のクラスではアーティキュレーションの印象が強かったようです。

河邊： アーティキュレーションにこだわってしまうのは先生の予想どおりでしたか？ それとも意外な感じでしたか？

安藤： そこまでこだわるのは意外でした。喜んで取り組んでくれたのはよかったのですが。

4つの方法（アーティキュレーション）を説明し、歌い方の工夫につなげる

記号などが書かれたシートを参考にして話し合い、楽譜に言葉やアーティキュレーションを書き込む

音楽の楽しみ方

河邊：小学校では習わないテヌートを取り上げて、先生が子どもたちに説明されていましたよね。「音楽発表会の曲にはこの記号がよく出てくるから、知っておいてほしい」とおっしゃっていたのが印象に残っています。授業と授業外の活動を結び付けて子どもたちに示されていました。また、中学校ではテヌートを学習しますので、学びの接続にもなっています。先生がそういったことを丁寧に指導することで、子どもたちの学習をより豊かなものにしていますね。

○かわべ・あきこ
兵庫教育大学 准教授

安藤：音楽は楽しむことがいちばんですが、学年によってその楽しみ方が違います。1年生は歌っているだけでも楽しいけれど、6年生になるといろいろ知ることで見方や考え方が変わり、もっと音楽が好きになる。中学校につながるような、1年生とは違う楽しみ方を覚えてほしいという願いがあります。家ではJ-POPばかり聴いている子が「クラシックもいいな」と感じる。特に今の6年生にはそういう感性が育っていると思います。去年、5年生で『威風堂々』を勉強して、卒業式の入場の場面でリコーダーといくつかの楽器を入れて演奏しました。朝の時間に担任の先生が練習させてくださったのですが、子どもたちは「毎朝、気持ちが落ち着いていいな」と言っていました。

河邊：子どもたちの「もっと知りたい、深めたい」という気持ちを、指導する側がどうやって引き出すかが重要ですね。今日の授業で、2番の歌詞を選んで歌い方の工夫を話し合っているグループがおもしろいことを言っていましたので、いろいろ質問してみたんです。2番の歌詞は1番や3番に比べると印象が薄いかもしれませんが、子どもたちの話を聞いていたところ、(1～3番の)全体を見通して情景や心情の変化を意識しながら工夫を考えていました。例えば「2番の最後は優しく納める感じで、自分たちのところに帰ってくるように歌うんだ」と言うので、「どうして？」と聞くと、「そのあとの3番では気持ちが前に出るようになるから」と。ちゃんと解釈しているんです。あの解釈をぜひ他の子どもたちにも伝えたかったです。

安藤：全体の前ではなかなか理由まで言えなかったようです。

河邊：グループ活動を一旦止めて「今このグループでこんな話を耳にしたので紹介するよ」と言いながら、解釈も交えてモデルを全体に示してあげると、他の子どもたちも「こういうふうに考えるのって大事なんだな」と気付いたかもしれません。そうやって話し合いの仕方を学び、学んだことが音楽表現にも反映されると、さらに効果的だと思います。

安藤：そうですね。

音によるコミュニケーション

河邊：発表の場面で、先生は各グループの意見を音楽的に解釈して、フレージングやダイナミクスをその都度工夫して伴奏を弾いていらっしゃいましたね。

安藤：補助的に滑らかに弾くなど、いつも意識して変えています。

河邊：先生が伴奏を通して「君たちはこういうふうにこの曲を捉えたんだね。音楽として表すとこうなるよ」と示してあげることも、解釈を共有する手がかりになります。子どもたちに「先生の伴奏、聴いてる？」と茶々を入れたかったです(笑)。変化に気が付いている子がいたとしても、それに合うように自分の歌声をどう変えればいいのか、具体的な方法が見付からなかったかもしれません。

安藤：気が付いても言葉で言えない子はたくさんいますから、感じてくれるだけでも大事なことかなと思います。

河邊：そこが音楽の難しいところですけれど、最終的には言葉で表せないことをやっているわけですから。言葉でうまく言えない子もいるけれど、その表情や所作、歌声を先生が受け止め、ご自身も音楽で応えていかれる。

安藤：言語活動の充実ということが言われていますが、やはり音楽は音でコミュニケーションするのが大事だと思います。

河邊：音によるコミュニケーションを円滑にし、より深めるためには、言葉で確認することも必要ですね。言葉で自分の考えを互いに表明し合い、意見交流で新しい価値を発見しながら、最終的にそれを自分たちの音楽表現に反映するにはどうすればいいのかということを、子どもたちもよく意識していると感じました。

変声期の歌声づくり

河邊：ところで、今日の授業は6年生ですから、既に声変わりをしている子もいたと思うのですが、変声期の子どもへの指導、あるいは高学年の子どもの心理を考えた歌声づくりにおいて、心がけていらっしゃることはありますか？

安藤：変声期はだんだん早くなっています。今のクラスには変声期を迎えた子がけっこういて、高い音が出にくくなったときに、低い音で歌おうとしても音が取りづらいようです。だから場合によっては、その子どもたちだけ集めて1オクターヴ下げて音取りをしています。でも完全に変声期を過ぎた子はなかなかいないので、行ったり来たりする感じで、出にくいところは避けて、それ以外は上げて歌っている子もいます。

河邊：変声しかかっている子も、自分でうまく音を見付けて合わせるという歌い方をしていたので、先生による継続的なご指導があるのだろうと思いました。

安藤：いちばんは正しい音で歌うことですよね。特に低学年は、わーっと歌って何の音か分からないという感じですけれど、音楽発表会のときには1年生から指導している*ので、「よく聴いて歌う」というのを意識させて修正していきます。音をよく聴くことが身に付いているから、歌いながら「これは音が違うな」と気付き、意識して音を見付けることができるのだと思います。

＊授業は4～6年生の音楽を担当されている。

河邊：すごく溶け込んでいる感じがしました。周りの子どもたちも、自分たちのクラスの歌声にはオクターヴの響きがあることを受け入れながら歌っていたので。1年生のときから、歌いたいように歌うのではなく、音をよく聴いて、正しい音をねらって歌う意識をもたせているからなのですね。

○あんどう・ひろこ
岡山市立御南小学校 教諭

学校全体の音楽文化

河邊：「1年生のときから」というお話が出てきましたが、校長先生もおっしゃっていたように、安藤先生が学校全体の音楽活動におけるリーダーシップを取っていらっしゃる。授業時間数など運営上のさまざまな制約がありますが、全校の音楽文化の担い手は、やはりその学校の音楽科教員だと思います。

安藤：私は「今月の歌」を年間通して決めて、指導する目当てや曲のポイントを示した冊子を作っています。その冊子を全教員に配って「これで指導してくださいね」と

伝えています。4月の時点でその流れを考えるのは大変ですが、行事なども絡めながら1年間の計画を立てています。それから、校内の先生がたを集めた研修会も行っています。1学期は、手遊びが入っていたりリズムにのったりできる楽しい曲などを取り入れました。「こういうふうに指導してくださいね」というのを研修会で説明して、教室でも実践してもらう。それでもよく分からないと言われたら、直接指導しに行っています。1年生の先生がたからは、今年は学年で教えてほしいという要望があったので、毎月1回は1年生全員を集めて「今月の歌」を指導する時間をつくっています。

河邊：安藤先生がイニシアチブを取りつつ、学級担任の先生がたと「一緒にやっていきましょう」という取り組みとして位置付いているのですね。子どもたちが楽しく参加できることと、積み重ねによって音楽の力を付けることの、両方を大事にされた活動であると感じます。

安藤：新しい学習指導要領では「技能」について分けて書かれており、よりきちんと指導しなければいけないと感じました。やはり「技能」が身に付いていないと、高学年になったときに楽しめなくなるんです。歌唱においても、「この声の出し方でいいんだ」と自信をもって歌を楽しむためには、自分の中で納得するものが必要だと思うので、それを積み重ねていくようにしています。6年生はいろいろな場面で学校の中心的存在なので、「音楽もあなたたちが中心だよ、お手本なんだよ」と話しています。あの歌声を4月に入学した1年生が聴くと、「声ってこんなふうに出したらいいんだ」と思いますよね。

河邊：先生がそうやって綿密に計画を示されて、他教科や学校行事との関連も含め、学校運営の中に無理なく溶け込めるよう努力されているのですね。担任の先生がたも、子どもたちが音楽活動を積み重ねて育っていく姿に感化されると思うんです。子どもの成長を通して全校の音楽活動の意義を理解しているので、「協力します」「ぜひ教えに来てほしい」という気持ちになるのでしょう。各学校の事情や規模によって、なかなか全ての学校で同じようにはいかないと思いますが、たいへん参考になります。

小学校で感性を育てる

安藤：前任校は各学年2クラスの学校で、1年生から6年生まで全クラスの音楽の授業を担当していました。その経験がとても貴重だったと感じています。各学年の子どもたちの実態、つまりどういうことができなくて、どういうことに関心があるのかが、だいたい分かるようになりました。

河邊：私も全学年を指導したことがありますが、6年間の発達段階を知っていることは大きいですよね。

安藤：ほんとうによい経験だったと思います。

河邊：今は大学で教師を目指す学生たちを指導していますが、小学生のときの音楽経験は大学生になっても忘れていないようです。小学校の音楽の授業は、子どもたちが大人になったときに音楽とどう向き合うか、そこに大きな影響を与えているように思います。

安藤：そういった意味でも、小学校での音楽は大事だと思います。感性という部分は目に見えないけれど、やはり生涯にわたって関わるものですから。ふだんから意識しているのは「のびのびと音楽を楽しめるようにする」ということです。私がいっぱいほめるせいかもしれませんが、子どもたちは「僕らはすごく歌が上手なんだ」と思っているみたいです。心が折れると歌って歌えないんですよ。だから折れないように、大事に育てています。

グループごとに工夫した点を表現しながら歌う

左から河邊昭子先生、安藤弘子先生

本時の授業の位置付け

前時までに『ふるさと』の歌詞に着目し、情景や作者の気持ちを理解したり、旋律の動きやリズムから強弱の変化を感じ取って歌ったりしました。また、各自で作者の気持ちがあふれていると思われる歌詞(大切な歌詞)を見付けています。

そこで本時では、グループに分かれて1～3番それぞれの歌い方を考えながら、「大切な歌詞」を1つに絞り、意見を出し合います。より思いを込めて歌うための工夫を考えたあと、全体の前でグループの考えを伝えてから歌を発表し、工夫した歌のよさを互いに聴き合います。グループでの対話により表現を深め、さらに歌うことでダイナミックな表現ができる喜びを味わう授業です。

國府島知子 先生
岡山市立御南小学校 校長

授業の流れ

	学習の内容、学習活動	指導上の留意点
導入	○ 今月の歌『喜びの歌』を歌う。 ○ 前時に各自が考えた歌い方で『ふるさと』を歌う。	• 発声のポイントを確認したあと、しっかりと声を出し、気持ちを高める。 • 前時の活動を振り返り、本時の活動につなげる。
展開	○ 目当てをもち、活動の見通しを立てる。 • 言葉の違いと歌い方の違いを確かめる。 • 「大切な歌詞」の歌い方の違いを確かめる。 ○ グループで歌い方の工夫を考え、楽譜に記入する。 ○ グループごとに考えた歌い方について説明してから歌う。 ○ 各グループの発表を聴いてよかった点を互いに伝え合う。	• 各自の考えを出しながらグループで話し合い、歌い方を工夫しようという目当てをもつ。 • 言葉と歌い方をつなげる活動を行い、見通しを立てる。 • 「大切な歌詞」について、グループで1か所に絞ったあと、その歌い方を4つの方法(スラー、スタッカート、アクセント、テヌート)から選び、決めていく。 • どちらの歌い方がいいか迷ったときには実際に歌ってみる。 • 工夫した点の理由を含めて説明する。 • よかった点を伝えることで、表現のよさを認め合う。
まとめ	○ 各グループが考えた歌い方を全員で歌い、本時のまとめとする。	• 歌うことで、他のグループが考えた表現のよさを味わう。

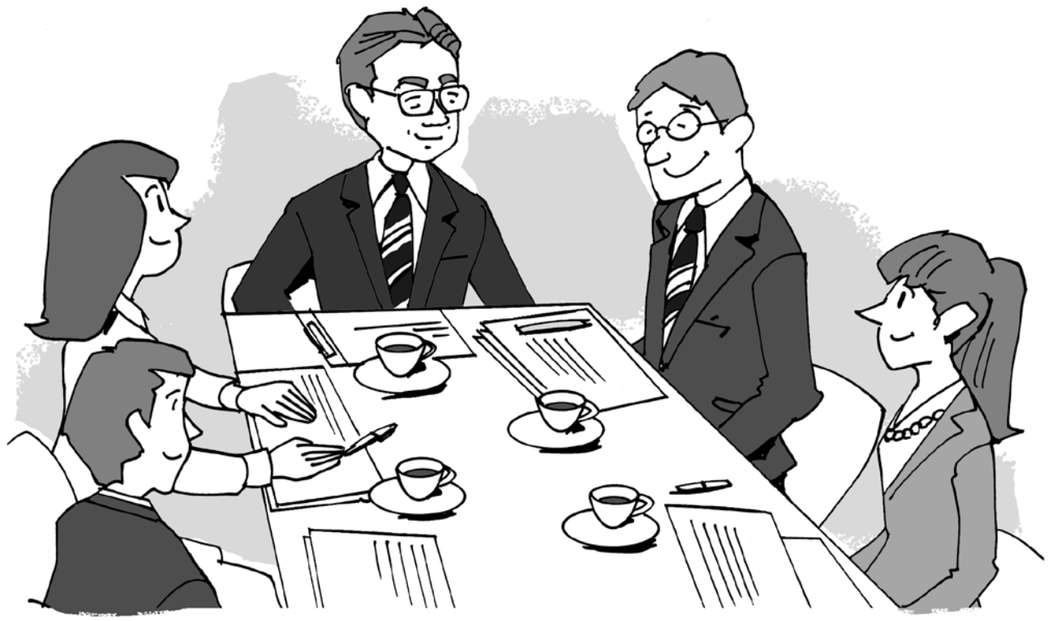
特集

実践への課題は？
新学習指導要領から考える

ほんね オフ ミーティング

本特集では、2017年に告示された新学習指導要領について、小中学校音楽科の先生にお集まりいただき座談会を開きました。話題は〔共通事項〕による授業の変化や、ご自身の指導で意識されていることや課題、音楽科の改訂を受けての意識変化についてなど、多岐にわたりました。４人の先生の「覆面による本音トーク」をお届けします。司会・進行は、全日本音楽教育研究会事務局長の小松康裕先生です。

A先生：小学校・音楽専科（男性）
B先生：小学校・学級担任（女性）
C先生：中学校・音楽科（女性）
D先生：中学校・管理職（男性）
司会・進行：小松康裕



〔共通事項〕による授業実践の変化

小松：今日は新学習指導要領の改訂内容を授業実践の中でどう具体化し活用していくかなど、お話しいただきます。私は現行学習指導要領に即した授業の展開に、何か行き詰まりのようなものを感じることがあるのですが、その状況を今回の新学習指導要領の改訂によって打破し、ステップアップしていくという意図が込められていて、私たちもそう受け取っていければと思っています。まず、現行学習指導要領のポイントであった〔共通事項〕で授業はどう変化してきましたか？

A：教員に採用されてまもなく、現行学習指導要領が告示されました。〔共通事項〕は、授業の切り口やねらいについてしっかり考えるきっかけになったと思います。難しいと感じるのは歌唱の授業。〔共通事項〕で考えていくと、最終的に子どもたちから引き出せた工夫の中身は「強弱」だけということが多く、子どもたちが強弱以外の音楽的な発想に自ら気付くように導くのは難しい。授業における歌唱の本質は、〔共通事項〕に当てはまらない部分が多いような気がします。

B：〔共通事項〕が示されたことによって、子どもたちが音楽を「なんとなくよい」ではなく、よいと思う理由をきちんと言えるようになったことはよかった。その一方で、言語活動のための話し合いが目的になってしまわないかが心配でした。「この言葉を引き出さなければならない」と私たちが思うあまり、子どもたちが萎縮して自由に発言できないのではと、気になることがありました。

C：中学校では話し合いだけで終わってしまう授業が増えたと思います。例えば『赤とんぼ』の授業で「どういう感情か考えてみよう」と考え合わせる時間が多くて「歌う」「聴く」という活動は１回だけ。これでは「音楽」とは言えないですよね。中学校ではどうしてもシビアに「評価」という言葉が付いてくるので、評価のための授業になっていないかと、私を含めて誰もが考えているのではないでしょうか。

D：〔共通事項〕が示されて、研究授業では、それまでの「感性豊かに歌唱表現しよう」などといった大まかな題材名の流れから、「歌詞の内容や曲想を感じ取り歌唱表現しよう」などのように学習内容が明確に示されたものに方向転換したのが大きかったと思います。教師が、子どもたちの学ぶべきことを少しずつ分かってきたといえます。しかし、研究授業の場で〔共通事項〕を窓口としてどのようにして学習を進めるのか、手だてが明確に示されないまま創意工夫させているということがあります。アクティブ・ラーニングという言葉も聞かれる中、ゴールの見えない話し合い活動のてんこ盛りで、音のない授業が20～30分続くような実践も見られ、危険な部分もあります。

小松：〔共通事項〕イコール「要素名」という捉え方が拭い切れなかったような気もします。授業の中における具体化に関して、変えていくべきと考える点や、現在心がけていることはありますか？

D：「今日の授業はね……」と言って、要素を黒板に貼り出して学習を進めていくことが全国的に広まり定着もしてきています。しかし、もう一歩先に進む時期に来ていると思います。要素が「どのように変化したのか」や「どんな気付きをしたのか」などといった音楽の流れを的確に自らが捉える活動を、発達段階にしたがって組み込まないといけないですね。音楽の授業も、より思考するようにしていかないと。

C：歌唱の場合、〔共通事項〕に示されたほとんど全ての音楽要素が入りますよね。特に合唱では全てが網羅されるので「この曲でいちばん大事なところはここだね」とは言いますが、ほんとうにいちばん大事なのは、子どもが実際に体験することですよね。頭で覚えさせたところで身に付かないし、声を出すだけでもだめ。視覚的な体験や、体を使った表現をさせることもあります。

B：研究授業のとき、子どもから音楽を形づくっている要素に関する発言があると、ほっとする自分がいることに気付きます。新学習指導要領には「働きと関わらせて」という言葉が多く出てきますので、やはり知覚と感受とが一体になるような授業にしていきたいですね。

〔共通事項〕を深い学びにつなげるために

小松：新学習指導要領の〔共通事項〕(１)アの事項の最後が、小学校では「聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えること」となっています。知覚と感受の関わりを「思考・判断・表現」することで、深い学びにつなげるという意図があるように思いますが、課題は何でしょう？

A：私が授業で気を付けているのは、今学んでいることに対して子どもたちが実感をもっているかということ。例えば強弱の学習なら、楽譜に*f*という強弱記号が書いてあるから強くするのではなく、子どもたちが曲を理解し、自然と強弱が付くようになる進め方があると思います。また、今日のねらいを冒頭で言う授業もいいけれど、ミステリー・トレインみたいにどこへ連れて行かれるか分からない授業もよいと思います。とりあえずやってみたらすごくおもしろくて、最後に「今日学んできたのは実はこういうことだったんだよ」とねらいを明かす授業があってもいいんじゃないかと。どうしたらそれがうまくできるかについて最近考えています。

D：歌唱表現において、例えばリタルダンドする表現は強弱でクレッシェンドする表現より指導するのは難しい。「ここはリタルダンドするところだから、まとめ方を自分たちで工夫してごらん」と言っても、なかなか難しいということを実感しています。子どもたちが試行錯誤しながら育ち、だんだんと気持ちよい世界を感じ取っていくことが必要です。それこそが音楽の質感を学ぶことになりますし、そうした授業をどうつくっていくのかが鍵だと思います。

小松：時間がかかることですが重要な部分ですね。どの領域の授業においても、子どもたちが知覚したことに気付き、感受の源を考え伝え合って捉えるのがグループ学習だと思います。グループ学習の進め方でうまくいかないと思う点や、工夫点などはありますか？

B：音楽づくりの活動をするときに、グループ活動は効果的だと思いますが、話し合ったことを発表するだけで終わってしまうと、深まりにはつながりにくいと考えています。グループ活動を授業の中のどこに取り入れていくかという見極めが必要だと思います。

A：私の授業では、グループごとに歌を発表しています。５人ぐらいの班ごとに前へ出て、演奏するときに大切にしていることを発表してから歌い、互いに聴く。教材によりますが、全体ではなくてグループ発表で終わるときもあります。

C：感じたことがあっても言葉にできない子は中学生でも多く、そういう子どもは一人ではうまく言葉が見つからないけれど、周りの生徒の意見を聞いて「ああ、そんなふうに言うのか」と気付くことがあります。音楽が苦手な生徒でも、グループ活動で教え合いたくさん考えられるのは利点ですね。

D：５つのグループがあれば「それぞれみんな表現は違っていい」というグループ学習でよいと思います。自分たちが表現しようとトライして思考判断しながらつくったものを、他者と評価し合うということが、まさしく学習の広がりです。学習の中で自分たちのつくったものをいとおしく思い、表現活動を通して、仲間の前で発表し表現したことを教師が評価するのが、個別の評価及び形成的な評価だと思います。

小松：子どもたちが自分たちの音楽表現が変わったことを実感し深い学びにつなげるために、アクティブ・ラーニングを取り入れることが大切だと思いますが、どんな方法を考えていますか？

D：話し合い活動ばかりで、結局何も変わらないのであれば、教師が教え込んだほうがいいのではないかと思うこともあります。でも教え込み教育は、音楽室を出ると冷めてしまう。必要なことを教え込むことは大事ですが、それだけでは子どもたちに定着しない。授業では、学びたくなるような関心・意欲を高めることが基本だと思います。

C：よく「工夫してごらん」と言うけれど、「工夫」は授業で学習した範囲でできるものだと思うんです。子どもたちができなかったら、私の教え方が悪いせい。歌唱を歌唱だけで教えるには限界があると思うんです。だから中学校なら創作を入れるとか、教えたいものがきちんと入っている教材を選ぶ。そして子どもたちが絶対に分かってくれるところを切り取り、それを授業の中でうまく組み合わせることに頭を使う、ということを皆さん必ずなさっていると思います。

B：確かに音楽や美術では「工夫してみよう」という言葉を使いますが、他教科では「もっと考えてごらん」と言いますね。いつも思うのは、音楽の授業はスパイラルしていかないといけないですよね。例えば、小学校２年生で習ったリズムを中学生になっても打てないことがある。「週２時間だからできなくてもしょうがない」ではなく、週２時間しかないからこそ９年間を見通したスパイラルで進めていかないと、いつも思い出で終わってしまうと思います。

指導事項のポイント

小松：新学習指導要領は分量的にも多くなりましたし、全ての教科で評価の観点が変わりますね。

D：これまでの４観点を３つの観点で評価することになるのだと思います。また、題材ごとの学習において、「思考力，判断力，表現力等」に関する資質・能力、そして「知識」に関する資質・能力、「技能」に関する資質・能力を全て評価していくことになります。これを題材の中で１つずつ評価していくという形になりますから、難しいですよね。合唱ばかり行っていると個別の活動は見えにくい。また、鑑賞活動で、ただ聴いている活動、ワークシートを書くだけの授業では、３つの観点を全て評価するのは難しい。評価計画を立てて、何ができるようになったかを見通して評価を考えていくのが理想です。

A：今回、３観点になるというところで、今まで「ア（関心・意欲・態度）・イ（創意工夫）・ウ（技能）」となっていたものが「イ・ウ・ア」の順番で示されたなという印象を受けましたが、そのあたりどうなのでしょうか？　工夫があって技能があって、順番が変わったと感じました。

D：「関心・意欲」という観点は、おそらく「育成すべき資質能力の三つの柱」の３番目に示された「学びに向かう力・人間性等」に関わることになると思います。関心・意欲がない授業はありえません。その上に知識及び技能や創意工夫がある。新指導要領では、これらを踏まえて評価をする項目が整理されていくことになっていくと思っています。

小松：創作（音楽づくり）の内容は今まで「ア」と「イ」しかなかったものが「ウ」も加わり、「知識及び技能」の内容についてより明確化を図ったため、小学校では特に多くなりました。

B：取り立てて新しいことを指導するわけではなく、目的と手段がこれまでより明確になった印象を受けました。音楽づくりに苦手意識のある教員も多く、同僚の中から「即興表現させたけど、それで？」とか「どの子がつくった曲も代り映えしない」などの声が上がっていました。今回の改訂を受けて、私たち教員もこれまでより目的をはっきりさせて、自信をもって音楽づくりの指導ができるような気がしています。

C：中学校では、分量が充実したことで「これだけ創作をやりなさい」という無言の圧力を感じました。おもしろいんですけどね。今まで学んだことを全て活用して活動するのが創作や音楽づくりなので。

D：歌唱や器楽で学習したことを土台として取り組むのが創作や音楽づくりなのかな。今回、小学校の音楽づくり（３～６年生）が「……即興的に表現する。」ではなく、「即興的に表現することを通して、……」となりました。中学校では、今も「即興的に音を出しながら音のつながり方を試しながら思いや意図をもってつくっていく」ことが解説に示されています。小学校でもこれと同じ流れになりました。今回の新学習指導要領は小・中ともに一貫性と一連性が備わってきたと思います。中学校の教師は、小学校の学習指導要領の内容をきちんと見て、もしそこが足りなければ補い、９年間を見通して積み重ねる学習をスパイラルに進めていくことが求められている気がします。

「生活や社会の中の音や音楽と関わる資質・能力」どう捉えるか

A：教科の目標に「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」とありますが、これを指導計画や各授業の中にどう落とし込んでいくのかを考えなければならないですね。

D：「生涯において」という意味を色濃く出すために示されたものでしょう。リコーダーをうまく吹いたり、歌をうまく歌ったりする子どもを育てることが目的ではなく、「音楽っていいな」「あの映画の、あのシーンの音楽がいいんだよな」など、生涯において音楽と関わり生活につなげることが大事なのかなと思います。我々の教科のしていることは、なんて言うのかな、“生きがい教育”みたいなところがあると思っています。点数だけでは語れないよさは教科の特質でもありますし、そこを大事にしていきたいですね。

B：今日の午前中、学校で持久走大会がありました。表彰式で校長先生が「金」「銀」「銅」の子どもたちにメダルをかけるとき、うちのクラスの一人が「ターンタータターンター」と歌い始めたんですよ。そうしたらどんどん広まっていき、最終的には全校みんなで歌いました。それが音楽の教師としてはちょっとうれしかったし、そのおかげで持久走大会という行事自体が温かく感じられたんです。次の音楽の時間には『見よ、勇者は帰る』を聴かせて「この曲なんだよ」と教えようと思いました。

C：まさにそれですよね。「生活や社会と関わる」と捉えてもよいと思います。私たちが考えている以上に子どもたちのほうが音楽の大事さや、重要性には気付いているのではないでしょうか。

B：究極のところ、知性と感性の両方を一緒に働かせることのできる教科ってやっぱり音楽だと思うし、この２つはいつもつながっていないといけない。私は音楽こそたいへん大きな役割をもっていると思うのです。

C：音楽を通して先人に学べますよね。音楽教室に通っていない限り、子どもたちがクラシック音楽を学べるところは学校しかないけれど、地域にあふれている音楽だって元をたどれば昔の音楽から発展してきたものです。音楽はいろんなものを通して深く学べることが大きいですよね。

音楽科で育てる「資質・能力」

小松：最後に、新学習指導要領の音楽科目標に示された“音楽科で育成を目指す資質･能力”について考えをお聞かせ下さい。

A：私は音楽専科なので、最初は「音楽を教える」という意識が強かったのですが、新学習指導要領では、より「音楽で育てる」ことを示されたという印象を受けました。「音楽を教える」のはもちろんですが、その一方で音楽をツールに授業を通して「音楽で育てる」という意識ももたなければと感じています。そのために、自分はこれから何を勉強しなければいけないのかということも考えなくてはならないと思っています。

C：小学校の先生がたは全教科に加えて音楽も指導もされているのはすごいなと思います。中学校でも、他教科のことを視野に入れなければならないと思いました。過去のことは分かりませんが、学習指導要領が改訂される度に「自分で考え、表現ができるような子を育ててね」と言われているような気がするので、そのためにどうするかを考えなければならないのですが。毎回どんどん目標が高くなり、私たちはいつも困るなと思っています。

B：観点も含めて、全教科が統一されました。そのため全教科を教えている立場としては指導しやすくなったけれど、音楽科特有の、音楽にしかできないことも考えなければなりません。そうしないと、音楽科特有のものが薄れてしまうと思います。

D：確かに全教科において「育成すべき資質能力の三つの柱」が整理され統一されました。それによる弊害も出てくるのではないかと心配しています。私たちは「音楽だからこそできること」を大事にしていきたいし、そうしなければいけない。A先生もおっしゃったように「音楽を教える」のではなく「音楽で育てる」ということをしっかり踏まえていかなければならないと思います。このことはとても大切で、実は全ての音楽活動に相通じる「大切なキーワード」のような気がします。

ほんね オフ ミーティングを終えて……

小松康裕（こまつ・やすひろ）
全日本音楽教育研究会 事務局長
武蔵野音楽大学音楽学部 非常勤講師

改訂趣旨を活かして音楽授業ステップアップを！

小松康裕

未来の創り手となる子どもたちに求められる「資質・能力」を明確にし、その三つの柱に基づいて教科等の目標・内容を再整理した新学習指導要領の告示から１年が過ぎようとしています。この間、各地で改訂趣旨を踏まえた音楽科授業研究が行われてきました。公開授業を参観する限り、現行学習指導要領が示した「思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力の育成」を目指す音楽科授業の方向性は維持され、新教育課程においても変わることはないでしょう。表現と鑑賞の学習活動の支えとなる〔共通事項〕は全国の音楽授業に広く定着し、今後も授業の中心に位置付けられるでしょう。その状況を踏まえたうえで、今先生方は今般の改訂内容をどう捉え、指導の何を変革し、何を維持していこうと考えているのか。存分に語って頂くのが今回の座談会の目的でした。

座談会中に私が述べた「現行学習指導要領に則した授業展開に何か行き詰まりを感じる」という問題提起は、〔共通事項〕の扱い方の課題や知覚・感受の協働的な学びとしてのグループ学習（活動）の在り方に関する提言で共通の改善課題として浮き彫りになったと感じました。そして、この部分の座談会後半では、新学習指導要領で〔共通事項〕のアをあらためて「思考力・判断力・表現力等」に関する資質・能力として示したことの意図を具現化しようとする発言も聞かれました。

第９次学習指導要領改訂は「知識の体系」から「資質・能力の体系」へと転換を図る大きな改訂であったと考えます。その趣旨周知は校種の段階的な全面実施に向け本格化するでしょう。座談会後半では音楽科で育成すべき「資質・能力」を実感を伴って理解しようとする参加者の積極的な意識を感じました。

世界に誇る日本の学習指導要領。その改訂を常に各自の授業改善の指針として真摯に受け止め、実践に活かしてきた教師の姿を改めて感じた座談会でした。

授業レポート

特別支援学校における ICTの効果的な活用

2017年10月27日・28日、「第21回視聴覚教育総合全国大会・第68回放送教育研究会全国大会 合同大会（宮城大会）」が開催されました。ヴァンでは、宮城教育大学附属特別支援学校で行われた中学部の公開授業を取材しました。ICTが効果的に活用されていた授業の様子をお届けいたします。

『聖者の行進』の合奏

ICTを活用して、世界の音楽に親しむ

授業に向かう雰囲気づくり

教室には大型の電子黒板が置かれ、生徒18名とティーム・ティーチング（TT）の先生がたがそれを囲むように着席。授業開始前から、ピアノ伴奏に合わせて『いいこと ありそう』『チャレンジ！』を歌う生徒たち。とても元気な雰囲気の中、授業開始の時間となった。

❖ ❖ ❖

まずは先生のギター伴奏に合わせて『みんなそろって』を歌う。電子黒板には大きく歌詞と手拍子のリズムが表示されていた。8小節の短い曲だが、繰り返すたびに速く歌ったり弱く歌ったりと、生徒たちは音楽の要素の変化を感じて表現を楽しんでいる様子。音楽の授業の始まりを自然と意識できる工夫がされた曲であった。

初めて知る音楽を、より身近に感じる

歌が終わったところで、先生が「今日から新しいお勉強です。日本を飛び出して、外国の音楽を勉強しましょう」と呼びかけ、電子黒板に次々と世界の写真が映し出された。「これはどこの国かな？」との問いには、「スイス！ アメリカ！ ブラジル！」と、生徒から積極的に声が上がり、さまざまな写真を見て興味が膨らんでいるようだった。「この中から、世界の音楽を勉強していくよ。今日は2つ音楽を聴きます」と本題に入っていった。

『シヤハンバ』の映像を再生したあと、曲の説明と歌詞を表示

1曲目は、南アフリカ発祥の合唱曲・賛美歌『シヤハンバ』。まずは国や曲名は伏せたまま、現地の子どもたちが歌う映像を再生。初めて見聞きする音楽に生徒たちは興味津々で見入っていた。さらに、歌っている子どもたちの踊りを先生がまねしてみせると、生徒たちも自然と音楽に合わせて楽しそうに体を動かしだす。その後、「これは南アフリカの曲で、行進するという意味があるんです。皆さんも歌ってみましょう」と、電子黒板に歌詞の一部分（先生が原語をカタカナで表記したもの）が表示され、みんなで歌う。途中からTTの先生によってカホンやボンゴのリズム伴奏が加わり、生徒たちはリズムを感じながら何度も繰り返し歌っていた。

この場面では、大きな画面を通して自分たちの知らない音楽文化に触れることと、歌詞を大きく映し出し共有することに電子黒板が活用されていた。加えて、打楽器の生演奏のリズムを実際に感じて生徒自身が声を合わせて歌う、という“アナログ”的要素がICTの活用と融合し、まるで映像で見た音楽の世界に自分たちが入り込んだような臨場感を感じることにつながっていた。

生徒の意欲を引き出す

次の曲に進もうとしたところで、生徒から「次は何の曲？」との声が。早く次の曲を聴きたいと生徒もわくわくしている様子。2曲目は、アメリカ民謡の『聖者の行進』。こちらも国や曲名を伏せたまま映像を再生し、生徒たちに見せる。「アメリカの音楽です」と先生が紹介し、写真と地図や国旗が電子黒板に大きく映し出され、視覚からもどの国の音楽であるかが理解できる工夫がされていた。

ここで、TTの先生がアルト・サクソフォーンを持って登場。初めて楽器を見る生徒も多いようで、「トランペットに似ているけどちょっと違う」「リコーダーみたいに穴が開いていない」「そんなに重くないんだ」との感想や、すぐ近くで楽器の音を聞き思わず耳をふさぐ生徒もいた。

この曲では、先生の演奏するアルト・サクソフォーンの旋律に合わせて、生徒も一緒に楽器を演奏する。ボンゴ、カラーチャイムバー、小太鼓、カホン、タンブリンなど、全員それぞれの楽器を担当し、リズムの練習をしてからいよいよ合奏。さまざまな障害をもった生徒たちがおり、リズムにのって演奏する生徒もいれば、なかなかみんなと合わせて演奏ができない生徒もいたが、合奏が始まると教室全体が一体となり音楽がつくり出され、生徒一人一人の生き生きとした姿に音楽のもつパワーを実感した。演奏後には生徒から「世界の音楽は初めてで楽しかった。特に太鼓が楽しかった」「歌が楽しかった」という感想が上がり、演奏が終わっても旋律を歌い続けている生徒の姿も。生徒たちの心には忘れられない記憶となったのではないだろうか。

担当する楽器を決める

最後に、今月の歌『友だちだから』を歌ったあと、授業の振り返りでは「今日は2つの音楽を勉強しましたが、これからいろいろな国の音楽を勉強するから、楽しみにしていてね」と、次時への期待をもたせた形で授業は終了となった。

❖ ❖ ❖

ICTの活用を通した音楽体験

授業を通して、随時電子黒板に本時の活動の流れが表示されていたことで、生徒が見通しをもって授業に取り組めていた。また、写真や歌詞の表示、音や映像の再生が電子黒板で効率よく行われ、授業の進行や知識の習得はICTの活用でスムーズに行われていた一方、歌ったり聴いたり演奏したりといった活動は、生徒自身が直接音楽に触れることができるよう、いわゆる“アナログ”で行われ、それらを両立させることで生徒が音楽や文化を理解し実感できる工夫がされていた。

先生がアルト・サクソフォーンを演奏

本大会の研究テーマは、「児童生徒一人一人の深い学びを実現するために～ICTやメディアの特性を生かし，実体験を大切にした授業実践～」。「実体験」は、まさに音楽科では必要不可欠な要素である。ICTに頼ることではなく、ICTを活用することでより充実した“アナログ”の実体験ができ、また音楽を通したつながりも育むことができる、音楽科におけるICT活用のポイントが凝縮された実践であったと感じた。

（ヴァン編集部）

本時の流れ

	主な学習活動	活動内容・手立て
導入	1 始まりの挨拶 2『みんなそろって』	• 電子黒板で活動の流れを提示することで、見通しをもって活動に向き合えるようにする。 ○ ギターの演奏に合わせてリズム打ちをしながら歌う。 • 電子黒板で歌詞やリズムを提示することで、活動への理解を促す。また、リズムを提示することで、活動のルールを理解して活動できるようにする。
展開	3 主活動 「世界の音楽を知ろう！」 「歌って演奏してみよう！」 4 今月の歌『友だちだから』を歌う。	○ 本題材で行うこれからの学習についての説明をし、学習内容を知る。 ○ アフリカやアメリカの音楽を取り上げて、これからの活動の意欲付けを行う。 • 各国の独特な音楽を動画で紹介することで、その国の音楽を身近に感じることができるようにする。 • 行ったことのない国の音楽でも、その国の雰囲気や音楽の臨場感を味わうことができるようにする。 • 電子黒板で歌詞を提示することで歌詞を見ながら歌ったり、歌詞の意味を考えながら歌ったりすることができるようにする。
まとめ	5 振り返り 6 終わりの挨拶	

授業メモ

・宮城教育大学附属特別支援学校
　中学部1～3年
・教諭：T1 渡部明希先生
　　T2～8 中学部教員7名
・単元名：「世界の音楽に親しもう」
・活用ICT：電子黒板、音楽動画 他

水谷好成 先生
宮城教育大学附属
特別支援学校 校長

Information

2018年に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

研　究　大　会

8月　August

●17日(金)

第37回 全日本合唱教育研究会 全国大会 札幌大会
札幌市教育文化会館 大ホール

〈大会主題〉
さわやかな風とともに つながる心 響きあう歌声
～共有・共感しながら音楽表現を高める合唱指導～

〈講師〉若松 歓、大熊崇子、田久保裕一

［問い合わせ］
実行委員会事務局長
札幌市立もみじ台中学校長 平田純逸
TEL 011-897-4584
http://scholachorus.jimdo.com/

10月　October

●20日(土)

平成30年度 全日本音楽教育研究会全国大会
大学部会大会

聖徳大学

〈大会主題〉
未定

［問い合わせ］
本部事務局
〒176-0003 東京都練馬区羽沢1-13-1
武蔵野音楽大学内 全日本音楽教育研究会
TEL 03-3991-7462

●25日(木)・26日(金)

第59回 九州音楽教育研究大会 熊本大会
第58回 熊本県音楽教育研究大会 熊本市大会

熊本県立劇場 他

〈大会主題〉
感じとろう 伝えあおう 高めあおう 音楽のよろこびを

［問い合わせ］
平成30年度九州音楽教育研究大会熊本大会事務局
大会事務局長 西原弘倫
〒861-2101 熊本県熊本市東区桜木4-13-23(熊本市立桜木中学校内)
TEL 096-365-1641 / FAX 096-365-1705

11月　November

●1日(木)・2日(金)

平成30年度　全日本音楽教育研究大会
高等学校部会大会 栃木大会

宇都宮市文化会館

〈大会主題〉
音楽の喜び！ 豊かな感性 ひろがる未来

［問い合わせ］
平成30年度全日音研全国大会高等学校部会栃木県大会事務局
栃高教研音楽部会事務局 鈴木真由美
〒328-0016 栃木県栃木市入舟町12-4(栃木県立栃木高等学校内)
TEL 0282-22-2595 / FAX 0282-22-2534

●2日(金)

第60回 北海道音楽教育研究大会 釧路大会

釧路市生涯学習センター(まなぼっと幣舞)他

〈大会主題〉
高まる 深まる 広がる 音楽の力

［問い合わせ］
第60回北海道音楽教育研究大会釧路大会事務局
釧路市立愛国小学校内 種市文彦
〒085-0057 北海道釧路市愛国西1-25-3
TEL 0154-36-5680 / FAX 0154-37-3085

●8日(木)・9日(金)

平成30年度 全日本音楽教育研究会全国大会
小・中学校部会大会 和歌山大会
第60回 近畿音楽教育研究大会 和歌山大会
第56回 和歌山県音楽教育研究大会

和歌山県民文化会館 他

〈大会主題〉
ひらく・のびる・ひびきあう
～ときめく学びのある音楽の授業～

［問い合わせ］
全日本音楽教育研究会全国大会・和歌山大会事務局
大会事務局長 岩本浩志
〒640-8311 和歌山県和歌山市寺内426(和歌山市立岡崎小学校内)
TEL 073-471-1750 / FAX 073-471-8900
iwamoto.hiroshi@wakayama-wky.ed.jp

●16日(金)

第66回 東北音楽教育研究大会 庄内大会

酒田市民会館 希望ホール 他

〈大会主題〉
つなぎ合おう 人・思い・音楽

［問い合わせ］
実行委員長
酒田市立松陵小学校 校長 佐藤文雄
〒998-0029 山形県酒田市住吉町9-36
TEL 0234-33-0627 / FAX 0234-33-6609

●16日(金)

第60回 関東音楽教育研究会 千葉大会
第53回 千葉県小・中学校音楽教育研究大会
東葛飾大会

松戸市文化会館(森のホール21)他

〈大会主題〉
感じ取り 表現し 共に伝える音楽のよろこび

［問い合わせ］
関東音楽教育研究会千葉大会準備委員会
準備委員長 髙橋久枝
〒270-0035 千葉県松戸市新松戸南2-1(松戸市立馬橋北小学校内)
TEL 047-344-8586 / FAX 047-349-4104

●22日(木)

第49回 中国・四国音楽教育研究大会 島根大会

島根県民会館 他

〈大会主題〉
感じてつながれ！ 感じてひろがれ！

［問い合わせ］
事務局
松江市立美保関小学校 教頭 飯塚由紀子
〒690-1313 島根県松江市美保関町下宇部尾555-1
TEL 0852-72-9200 / FAX 0852-72-2844
mihonoseki-e@city.matsue.ed.jp

教育芸術社ホームページでは、この他の研究大会やイベントなどの情報も掲載しています。
http://www.kyogei.co.jp/data_room/event/

— 新作合唱曲による公開講座 —

Spring Seminar 2018

コンクール自由曲向けの新曲発表会「Spring Seminar 2018」を開催いたします。
同声・女声・混声の各2曲(全6曲)を合唱団、司会者、作曲家と学びます。
セミナー終了後「小学校の部」「中学校の部」「高等学校の部」に分かれて、Nコン課題曲のワンポイントレクチャーも行います。

● 日　時：2018年3月27日(火)
12：45～17：20

会　場：武蔵野音楽大学(江古田キャンパス)
中ホール「ブラームスホール」
〒176-8521
東京都練馬区羽沢1丁目13-1
西武池袋線「江古田駅」北口 徒歩4分
西武有楽町線「新桜台駅」4番出口 徒歩4分
東京メトロ有楽町線/副都心線
「小竹向原駅」2番出口 徒歩9分

参加費：4,000円(高校生以下2,000円)
資料・楽譜テキスト代を含む

● 司　会：藤原規生

作曲家：［同声］佐井孝彰、なかにしあかね
［女声］加藤昌則、横山潤子
［混声］名田綾子、山下祐加

合唱団：八千代少年少女合唱団
(指揮：長岡利香子)
女声合唱団 ゆめの缶詰
(指揮：相澤直人)
harmonia ensemble
(指揮：福永一博)

● Nコンワンポイントレクチャー

講　師：藤原規生、相澤直人、三宅悠太
(小中高未定)

● お問い合わせ：
株式会社教育芸術社
スプリングセミナー実行委員会
TEL 03-3957-1168
FAX 03-3957-1740
http://www.kyogei.co.jp/

申込み受付中です(先着順で定員になり次第締め切らせていただきます)。

Kyogei Presents

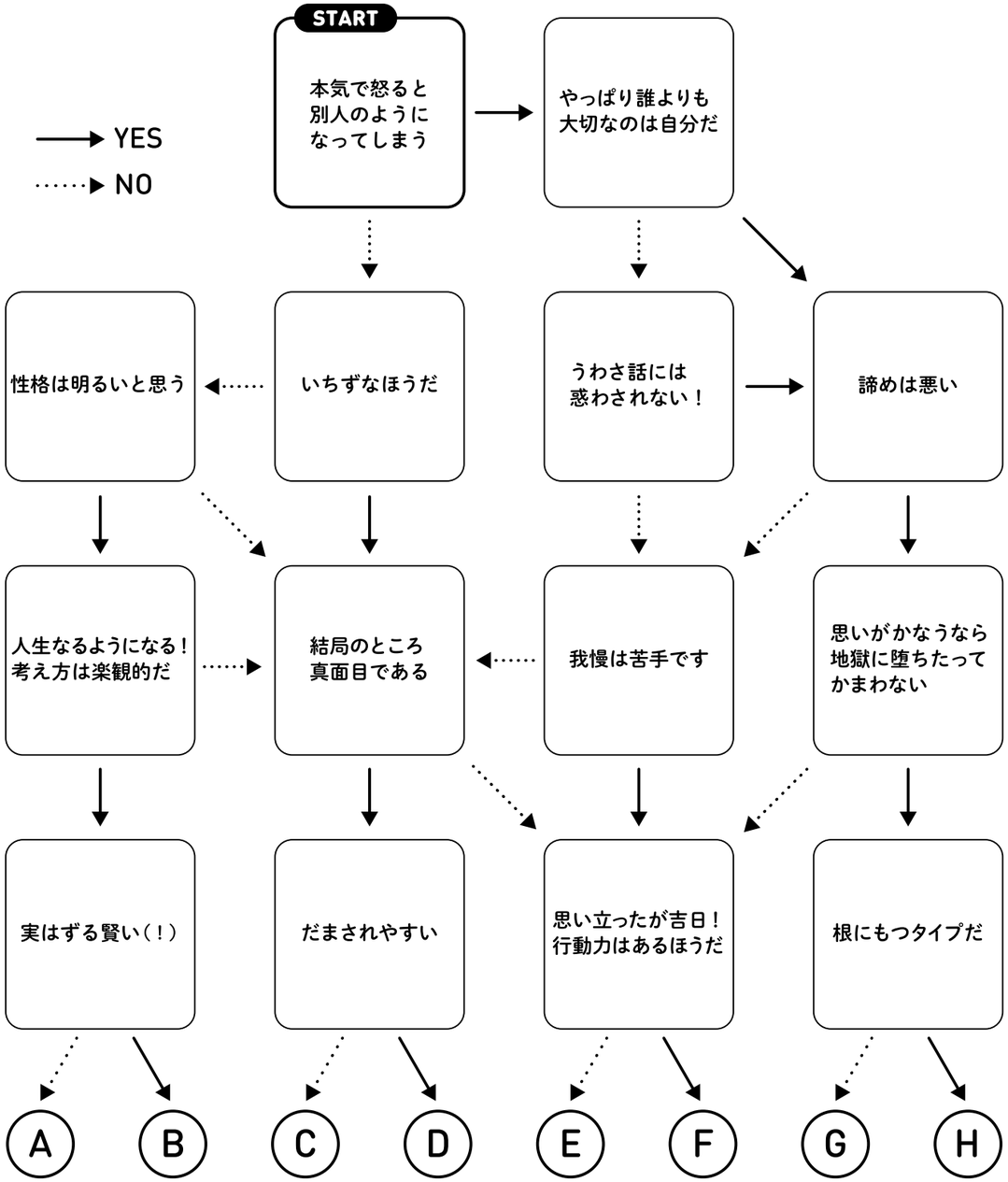
音楽診断

あなたのタイプは？

第❷回 モーツァルトの名作オペラ編

前号からスタートした、教育芸術社オリジナルでお届けする音楽診断企画。2回目は、モーツァルトが書き上げた名作オペラから診断します。魅力たっぷりで個性的な８人の中から、あなたに似ている登場人物をご紹介します。

監修・解説＝岸 純信
Text＝Suminobu Kishi



登場人物をご覧いただく前に……

モーツァルトのオペラあらすじ

①『フィガロの結婚』（初演：1786年5月1日、ブルク劇場）

横暴な主人の伯爵に従僕フィガロが抵抗し、愛する小間使いスザンナと無事結婚するまでを描く喜劇のオペラ。夫に顧みられない伯爵夫人の辛さや、恋に目覚めた小姓ケルビーノの情熱がドラマにアクセントを添えている。

②『ドン・ジョヴァンニ』（初演：1787年10月29日、プラハ劇場）

美男の騎士ドン・ジョヴァンニが女心を弄んだ結果、自分が殺した騎士長の霊に地獄に落とされるという喜劇と悲劇の混合オペラ。騎士長の娘アンナ、貴族の女性エルヴィーラ、村娘ツェルリーナが彼の魅力に翻弄される。

③『コジ・ファン・トゥッテ』（初演：1790年1月26日、ウィーンの宮廷劇場）

心の揺れを鋭く突く喜劇。老哲学者との賭けで青年たちが恋人姉妹の貞操を試すべく変装し、違う相手をそれぞれ誘惑。しかし、最後に全てが明らかになると、間を取り持った小間使いも含め、みな苦い思いを噛み締める。

④『魔笛』（初演：1791年9月30日、ウィーン郊外のヴィーデン劇場）

善と悪、高潔さと庶民性を対照させた童話仕立てのオペラ。正義を尊ぶ高僧ザラストロと権力欲に燃える夜の女王が対立する中、王子タミーノは夜の女王の娘パミーナと結ばれ、鳥刺しパパゲーノは恋女房と楽しく暮らす。

Ⓐ かわいがられる マイペースないたずらっ子 ケルビーノ ①

10代の青年。伯爵に仕える小姓でありながら、伯爵夫人への憧れをあらわにしたり、庭師の娘バルバリーナといちゃつくなど、恋に目覚めた年頃の少年として、次から次へと騒動を起こす愛すべきトラブルメーカーである。

Ⓑ 実はしたたかな世渡り上手 ツェルリーナ ②

村の娘。農夫マゼットと結婚したばかりなのに、ドン・ジョヴァンニから誘惑されてその手に堕ちそうになる。しかし、寸前のところで要領よく身を守り、マゼットに愛らしく赦しを乞い、彼がけがをすると優しく慰める。

Ⓒ いちずで聡明なヒロイン スザンナ ①

フィガロの婚約者。伯爵夫人のロジーナに仕える小間使いだが、結婚式の当日に伯爵から言い寄られてしまい、愛するフィガロとともに、知恵を絞って伯爵をみごとにやり込め、伯爵夫人への愛も取り戻させるという女性。

Ⓓ 情が深くひたむき いざとなったら潔い一面も フィオルディリージ ③

とても生真面目な娘。妹ドラベッラが自由奔放であるのとは対照的に、最後まで恋人に忠誠を誓おうとするが、目の前に変装して現れた別の男の魅力に抵抗できず、最後は彼の腕に抱かれてしまうという人間らしさももつ。

Ⓔ いやなことはいや！ 我が道を突き進む パパゲーノ ④

自由人の鳥刺し。王子タミーノとの出会いで、ザラストロの城でパミーナを探し、王子の試練にもつきあう羽目に。しかし、結局は試練の厳しさに耐えられず、精神的に成長はしないが、恋人のパパゲーナと楽しく暮らす。

Ⓕ 明朗快活の正統派ヒーロー フィガロ ①

元は理髪師。かつて、セビリアの町でアルマヴィーヴァ伯爵がロジーナに求婚する際に助けてやり、その縁で伯爵の従僕として城で働くが、徐々に貴族の横暴さを見せる伯爵には抵抗。才気と勇気で市民層の意地を示す。

Ⓖ 人々をひき付けてやまない 強烈な存在感 ドン・ジョヴァンニ ②

放蕩の騎士で飛び切りの美男。女心を手玉に取ることに何の抵抗もなく、従者レポレッロがあきれるのも構わず、次から次へと新しい女性を狙って行動を起こす。しかし、騎士長を殺したことから運命の歯車が狂い始め、最後は地獄に堕ちる。

Ⓗ 気性が激しいが愛情深い 夜の女王 ④

権力欲が強すぎて、夫の死後は高僧に実権を奪われてしまった女王。娘のパミーナへの愛情も有するが、その一方で、自分の力を取り戻すため、「ザラストロを殺せ」と娘を脅すなど、悪意と激しさに満ちた女性でもある。

岸 純信（オペラ研究家）

1963年生まれ。『音楽の友』『レコード芸術』『音楽現代』など雑誌や公演プログラムに寄稿。ＣＤ及びＤＶＤ解説多数。ＮＨＫ『ららクラシック』、FM『オペラ・ファンタスティカ』にたびたび出演。新国立劇場オペラ専門委員。静岡国際オペラコンクール企画運営委員。大阪大学外国語学部非常勤講師（オペラ史）。

教育芸術社ホームページの「資料室」→「音楽教育ヴァン」も併せてご覧ください。

イラストレーション：こばやしみさこ